

学習院大学アジアコレクションの世界ーデジタル化のあとさき

村松 弘 一

一、東洋文化研究所と私

みなさんこんにちは。村松と申します。現在、私は学習院大学国際研究教育機構という大学附置研究所に所属しておりますが、最初に学習院大学の教員として勤めたのはこの東洋文化研究所でした。以前にも何度か研究所の講演会などでお会いした方も多いのではないのでしょうか。一四年前、私が助手となった時、最初に企画した東洋文化講座は五二回目でした。年三回の開催で、今回九〇回ですから、ずいぶん時間が経ったように感じます。第五三回からは三回をひとつのテーマでまとめて広報し、さらに『東洋文化研究』に講演録を掲載するという形式を私の助手時代につ

くり、今に至っています。その今年の統一テーマが「デジタル化とアジア研究」、その一回目として今回、「学習院大学アジアコレクションの世界ーデジタル化のあとさき」と題してお話しさせていただきます。この表題ですと「学習院大学アジアコレクション」という資料群が存在しているかのように思いますが、そのような資料のまともにはありません。ここでは学習院大学が所蔵するアジア地域、特に中国大陸・朝鮮半島にかかわる文字資料（書籍・文書等）・非文字資料（文物・写真等）の総体を「学習院大学アジアコレクション」と呼びたいと思います。アジアコレクションの資料は東洋文化研究所だけではなく、大学図書館や大
学史料館、学習院アーカイブズ、そして私が所属していま

す国際研究教育機構などの部署で分散管理されています。それぞれの所蔵品は別々のWEBサイトで公開されています。今回お話しの内容をいただいた時には、デジタル化したコンテンツをひとつひとつお見せすればよいと思いましたが、それではおそらく皆さんがインターネットを介してご自宅で御覧になればよいとお思われるかと思ひ、今回は私が関係してきた学習院大学のアジア関係資料の整理と公開を時系列に整理して、そのときに直面した問題点や作業で重視したことをお話ししたいと思います。

私は二〇〇三年度から二〇〇六年度まで助手、二〇〇七年度に助教（職名変更）、二〇〇八年度から二〇一一年度まで准教授として東洋文化研究所に在籍していました。その後、二〇一一年度から二〇一三年度までは学長付国際研究交流オフィス教授となり、二〇一四年度から現在まで国際研究教育機構教授をしております。この間、様々なプロジェクトを通じて、学習院大学のアジア関係資料の整理・分析・公開をすすめてきました。私が部署を異動するのにもなって、その成果としてのデータベースも、東洋文化研究所や史料館のバーチャルミュージアムとして公開しているものもあります。大学図書館や国際研究教育機構のコンテンツもあります。このような状況ですのおそらく、一般の方々には全体像がわかりにくいと思います。今回のお話ですこしはおわかりいただけるようにしたいと思います。

皆さんご存じの通り、戦後、一九四九年に学習院大学が創設され、一九五二年に学校法人学習院のもとに東洋文化研究所が開設されました。朝鮮史の研究者である末松保和先生を中心として発足した研究所の最初の事業は『李朝実録』の普及本の刊行でした。この事業は一九六七年に完了し、その後の一九七六年には大学の附置研究所になり、共同研究プロジェクトがおこなわれるようになりました。そのなかでも学習院大学図書館所蔵の「朝鮮戸籍大帳」の研究は日本・韓国の研究者が注目する看板プロジェクトになりました。そのプロジェクトも二〇〇三年三月に目録が刊行され完結します。二〇〇〇年には朝鮮総督府関係資料「友邦文庫」の所有権が学習院に譲渡され、そのなかのオーブンのテープに残された音声記録を「朝鮮総督府関係者録音記録」として年報『東洋文化研究』に活字化して発表し、そのシリーズは現在まで十七回に及んでいます。録音記録は、新たな東洋文化研究所のメインプロジェクトとして、内外の研究者や市民の皆さんの注目を集めています。このように東洋文化研究所は創設当初から、いわゆる朝鮮史、朝鮮の近世・近代史の研究拠点として研究実績を残してきました。

二〇〇三年には私は東洋文化研究所の助手となりました。私の専門は中国古代史ですので、朝鮮史を中心とした東洋文化研究所の研究活動の中軸を担う役回りではありません。

した。ところが、その後、二〇〇三年の夏以降、状況がかわってきます。どのような変化があったのでしょうか。以後、第一段階二〇〇三年～二〇〇七年、第二段階二〇〇七年～二〇一一年、第三段階二〇一二年～二〇一四年、第四段階二〇一五年～現在と時代区分をして話をすすめます。

二、第一段階 二〇〇三年～二〇〇七年

アジアコレクション調査のはじまり

二〇〇三年の夏休み前、研究所の事務室のスタッフから「今年は経常予算のほかに三〇〇万円ぐらい特別予算があり、それに全く手がつけられていないのです」と唐突に言われました。その予算というのは学習院新規重点施策（戦略枠）「学術資料・文書等の管理と有効利用の在り方調査プロジェクト」（二〇〇三年～二〇〇四年）でした。大学図書館と文学部の先生方が中心になって計画されたもので、通称「お宝プロジェクト」と呼ばれた事業です。学内の文書・資料の全体像を明らかにするプロジェクトで、東洋文化研究所は学内の東アジア関係の資料を調査することが求められました。最初は東洋文化研究所の所蔵資料から、その後は大学図書館の漢籍資料にも調査の範囲を広げました。このプロジェクトが文学部ではアーカイブズ学専攻の開設へとつながり、また学校法人学習院に学習院アーカイ

ブズという部局ができる布石になりました。さらに、東洋文化研究所では、この動きを継続させるために二〇〇四年から二〇〇七年まで学習院大学東洋文化アーカイブズプロジェクトをおこなうこととなります。このころから東洋文化研究所は朝鮮関係のみならず、中国大陸を含めた「東アジア研究」や「東アジア学」という枠組みを学内外に押し出すようになります。

すでに友邦文庫の資料価値については、世界各国の朝鮮史・日本近代史研究者の知るところとなっており、二〇〇五年五月にはハーバード大学の研究者から友邦文庫についてポストンで紹介しませんかというお誘いを受けました。その際、学習院大学の朝鮮関係以外のアジア関係資料についても紹介してほしいとのこと、当時の岡孝所長、大澤顯浩先生、辻弘範助手、鹿島晶子さんと私の五名で現地へと赴きました。私は「学習院大学所蔵東アジア関連資料について」という題名で報告しました。発表にあたり、それまでの二年間の調査で判明した資料を、以下のようなカテゴリーに分けました。

(1) 磯野文庫（モンゴル関係）

(2) 旧東亜経済調査局所蔵回教関連資料（イスラーム

関係）

(3) 林博太郎文庫（満洲・中華民国における中国語教

科書全六八タイトル、二七二冊）

(4) 田中耕太郎文庫（戦前の満洲・蒙古における法律関係の資料）

(5) 乃木希典文庫（六〇〇タイトル、九七四冊。台湾総督府関連図書あり）

(6) 漢籍資料（京都学習院、華族会館旧蔵書など）

(7) 友邦文庫（友邦協会・中央日韓協会旧蔵書）

(8) 風俗写真・絵はがき資料（朝鮮・満洲）（旧制学習院歴史地理標本室移管資料）

(9) 朝鮮戸籍大帳

(10) 広開土王碑拓本

詳しい説明は東洋文化研究所のホームページに紹介文があります。(1) 磯野文庫は法社会学者の磯野誠一さんの資料群は最終的にどのようなかたちで東洋文化研究所に入ったのかはよくわかっていません。磯野さんのご自宅が大学のすぐ側にあつたということ、小倉芳彦先生からお聞きしましたが、それ以上のことはわかりません。(2) 旧東亜経済調査局所蔵回教関連資料は古書店で購入したものです。戦前の日本軍は満洲、モンゴルそしてウイグルのイスラム勢力を組み込んで、中国大陸に勢力を広げる戦略を繰り返しますが、東亜経済調査局はそのための機関と言われています。(3) 林博太郎文庫は満洲国の中国語の教科書です。林博太郎という方は満鉄の総裁で、そのおさ

さんの林友春先生が学習院にいらつしやつたので大学に寄贈されました。これは大学図書館にあります。(4) 田中耕太郎文庫は、法経図書センターにあるものです。最高裁判所の長官にもなった人物で、満洲国の法律関係の書籍があります。(5) 乃木文庫は乃木希典院長もしくはその遺族が寄贈した一連の書籍・文書です。このなかには、乃木が台湾総督であつたことから、台湾総督府関係の資料があります。(7) 友邦文庫は前述した朝鮮総督府関連資料、(8) 風俗写真・絵はがき資料は後で説明します。(9) 朝鮮戸籍大帳は近世・近代の朝鮮の戸籍で、大学図書館所蔵です。(10) 広開土王碑拓本は東洋文化研究所蔵、五メートルを超える拓本です。

二〇〇三年後半から二〇〇七年前半までの四年間は朝鮮・中国を中心とした学習院大学のアジア関係資料の全体を調査・整理することに注力し、公開に向けた準備の時期と言つてよいでしょう。さらに、調査のなかで朝鮮・中国文献のみならず、満洲語文献やモンゴル、回教、台湾関係資料があることをしっかりと認識できたことは大きな成果でした。また、二〇〇七年一月にはハーバード大学のカーター・エッカート教授、マーク・エリオット教授を招聘し、「学習院大学・ハーバード大学国際学術シンポジウム 東アジア学のフロンティア」と題したシンポジウムを開催しました（『東洋文化研究』一〇号に掲載）。友邦文庫を中心

とした朝鮮総督府に関する研究と満洲語および満洲研究に関する最新研究をハーバード大学の研究者と学習院大学でおこなうことができたことは大きな成果であったと思います。

三、第二段階（二〇〇七年～二〇一一年） アジアコレクションの公開

前段階の研究実績を基盤に二〇〇七年から二〇一一年まで文部科学省のオーブンリサーチセンター整備事業に採択され、東洋文化研究所内に「学習院大学東アジア学ナレッジセンター」を設置しました。引き続き学内の資料を調査・整理し、さらに、それを公開する段階に入ります。特別展覧会の実施、図録や目録の書籍の出版、データベースやバーチャルミュージアムのWEB公開の三つの方法から成果の公開をすすめました。

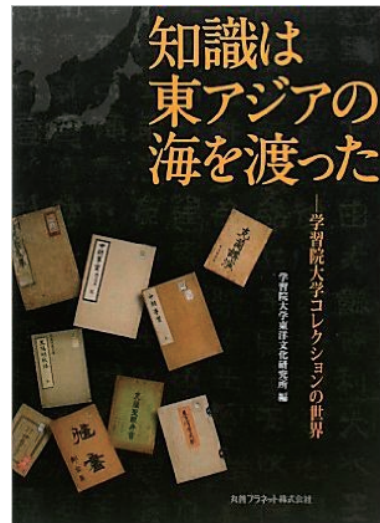
最初の展覧会は、二〇〇八年九月に学習院大学の多目的ホールで実施した「東アジアにおける陽明学」という展示でした。台湾の清華大学の楊儒賓教授所蔵の陽明学者の書と学習院の所蔵する王陽明や李卓吾の著作など漢籍三〇点余りを展示するという試みでした。『東アジアにおける陽明学 第II部学習院大学所蔵漢籍からみる東アジア』という図録も作成しました。

さらに、二〇一〇年一月には史料館展示室と丸善本店ギャラリーの二カ所を舞台に、学習院大学開学五十周年記念特別展「知識は東アジアの海を渡った―学習院大学コレクションの世界」をおこないました。この展示では、学習院の歴史をパネルにして展示壁面に貼り付け、その前に一〇〇点の資料を並べるといった試みをしました。図録は「知識は東アジアの海を渡った―学習院大学コレクションの世界」（学習院大学東洋文化研究所編、丸善プラネット）として刊行しています。学習院の歴史を「第一部 京都学習院」「第二部 華族会館と学習院」「第三部 明治の学習院と東洋学」「第四部 大正・昭和の学習院の学び」「第五部 学習院大学の開学、東洋文化研究所の開設」の五部分に分けて展示しました。展示品のうち漢籍のほとんどは学習院大学図書館蔵、文物（実物教材）は大学史料館蔵、ほかは東洋文化研究所蔵となります。「第一部 京都学習院」は、京都に学習院が開講していた時期の資料群。「学習院印」「京都中学」の旧蔵印がみられ、『性理大全』などの漢籍を展示しました。「第一部 華族会館と学習院」は華族の子弟のための学校として明治一〇年に東京に開設された学習院の初期の蔵書。徳川宗家や元藩主から華族会館に寄贈された書籍が学習院に移されました。「会館之印」「華族会館書籍局之章」の印が見られ、『唐文粹』『史記（慶長古活字版）』『白氏長慶集』『水経注』などの漢籍のほか、洋書もありま

す。「第三部 明治の学習院と東洋学」は明治三〇年代以降、学習院の教員らによって購入・蒐集された東洋学の資料を集めました。学習院では白鳥庫吉が「東洋諸国の歴史」という科目をつくりました。これが日本の東洋史、東洋学の授業のはじまりと言われています。そういった白鳥庫吉以来の東洋学の授業の教材として、白鳥庫吉が購入した朝鮮本や満洲語文献、塩谷温が購入した漢籍などがあります。朝鮮戸籍大帳もこのころ購入したものです。乃木文庫もこのカテゴリーで展示しました。「第四部 大正・昭和の学習院の学び」では亀田記念図書漢籍や旧制学習院の歴史地理標本室の資料を展示しました。「第五部 学習院大学の開学、東洋文化研究所の開設」では、東洋文化研究所所蔵の広開土王碑拓本・友邦文庫・磯野文庫・旧東亜経済調査局回教関連資料などを展示しました。展覧会を開催することによってのべ一〇〇〇名以上の市民の皆さんに学習院の資料を御覧いただき、興味を持っていただく機会を提供できたことは意義があったと思います。また、私たちも、展覧会の準備と図録の作成によって、それまで調査で蓄えた研究成果を今一度整理する良い機会になったと思います。

さらに、この時期には友邦文庫と漢籍の目録を作りました。『友邦文庫目録』（勁草書房、二〇一一年）は一九八五年に刊行した『友邦協会・中央日韓協会文庫資料目録』を全面改定したもの。『学習院大学図書館（旧分類書庫）所蔵漢籍目録稿』（学習院大学東洋文化研究所、二〇二二年）は学習院大学図書館所蔵漢籍の所蔵目録です。

このような特別展と書籍の刊行を通じて、東京、日本の皆さんには少しずつ学習院のアジアコレクションを紹介できましたが、さらにそれを世界へと発信するためにはどうすべきか。インターネットを通じて広げるという試みとしてデジタル化をすすめていきます。すでに、第一期でハ



『知識は東アジアの海を渡った』

バード大学の研究者にも興味をもっていただいていることもわかっていましたし、また、友邦文庫の閲覧のために米国のコロンビア大学やブラウン大学の研究者が東洋文化研究所に足を運び、また、「東アジア書誌学の招待」という連続講演会を通じて多くの国内外の研究者が学習院大学所蔵の漢籍に注目するようになっていました。各国の研究者や市民が見るためのコンテンツとしてのデジタル化をすめたいと考えました。その第一弾として東洋文化研究所のサイトの中に堀内カラーと共同で製作したのが「東アジア学バーチャルミュージアム」です。その名の通り、当初は「知識は東アジアの海を渡った」という展覧会そのものを体験できるようにバーチャルミュージアムをつくらうとしたんですけれども、業者の人に、それでは見る人はいませんよ、一回見て終わりじゃないですか、それよりも資料をわかりやすく並べていく作業からまず始めたらどうですか、それを世界の人たちが見られるようにするべきじゃないですかということを言われました。全体は五つのカテゴリーにわけられています。

東アジア学バーチャルミュージアムの構成

- (1) 前近代東アジアの世界
 - ・ 広開土王碑拓本
 - ・ 新羅村落文書
 - ・ 朝鮮金石拓本
 - ・ 旧制学習院歴史地理標本室コレクション (史料館蔵)
 - ・ 銅鏡 (林コレクション) (国際研究教育機構蔵)
- (2) 近代東アジアの世界
 - ・ 磯野文庫
 - ・ 旧東亜経済調査局回教関連資料
- (3) 友邦文庫の世界—朝鮮総督府関連資料
 - ・ 朝鮮問題雑纂 (阪谷文書)
 - ・ 渡辺忍文書
 - ・ 半島近世年表
 - ・ 朝鮮社会経済写真集 (善生永助蒐集写真)
 - ・ 韓国仁川写真帖
- (4) 漢籍の世界
 - ・ 東洋文化研究所蔵古典籍
- (5) アジアの肖像—学習院大学蔵古写真
 - ・ 学習院大学史料館所蔵ガラス乾板資料 (史料館蔵)
 - ・ 風俗写真・絵葉書資料 (満洲・朝鮮・アイヌ) (史料館蔵・東洋文化研究所保管)
 - ・ 中国大陸絵葉書資料 (史料館蔵)



東アジア学パーチャルミュージアム（学習院大学東洋文化研究所）
<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/rioc/vm/>

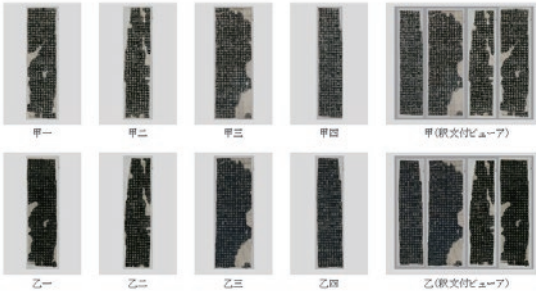
ひとつひとつ見ますが、まず、「前近代東アジアの世界」をクリックしますと、「広開土王碑拓本」「新羅村落文書」「朝鮮金石拓本」「旧制学習院歴史地理標本室コレクション」「銅鏡」と五つに分かれています。東洋文化研究所には甲本と乙本の二種類合計八枚の「広開土王碑拓本」があります。入手ルートは確定できませんが、学習院の教授であつ

た白鳥庫吉が学生を引率して、朝鮮半島に行った際に、その途中で集安に寄り、入手した可能性が考えられています。この拓本は5mをこえる大きさがあります。パーチャルミュージアムはイパレットという技術を使って表示するもので、細かい画像の集合体が一つの画像になっていますので、拡大・縮小が自由にでき、また、画像に積文のデータを組み込むことが可能です。拓本の資料一覧のページを開き、イパレット・ライムでの表示をしますと、一文字一文字が拡大され鮮明に表示できることがわかると思います。5mの拓本を上からつり上げて見るよりは、デジタル化したものを拡大することによって新たな発見があるかもしれません。二種類の拓本は原石拓本ではなく、一回石碑の文字を石灰で固め、文字を鮮明にした石灰拓本です。二つを見比べると、石灰がよく残っているものと石灰がはがれてきたものがよくわかります。それらを比較することが可能です。もうひとつの機能として積文付きビューワーがあります。ビューワーの左の積文を選択すると、拓本の画像にその部分が黄色く表示されます。しかも、二画面開けば、甲本と乙本を比較できるわけです。最終的には、国内各所にある広開土王碑の拓本がWEB上で比較できるようになれば、拓本研究がより進展すると思っています。「新羅村落文書」は正倉院文書の裏に書かれていたもので、現在はもう見るのできない資料です。それを写真撮影したも

■ 広開土王碑拓本 一覧

画像は別窓で開きます。拡大用ビューの表示にはFlash PlayerとJavaScriptが必要です。

> 解説



[このページのトップへ](#)

ので、朝鮮古代史の研究者には貴重な資料です。「朝鮮金石拓本」は戦後に末松保和先生が収集した拓本類です。

東アジア学
 パーチャルミュージアム

前近代東アジアの世界

広開土王碑拓本 甲 祝文付

1 1. 碑銘の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

2 2. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

3 3. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

4 4. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

5 5. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

6 6. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

7 7. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

8 8. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

9 9. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

10 10. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

11 11. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

12 12. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

13 13. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

14 14. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

15 15. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

16 16. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

17 17. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

18 18. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

19 19. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

20 20. 拓本の順序を正確に記述し、拓本の順序を「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。拓本の順序は「全文(甲)」「祝文(乙)」「碑銘(丙)」の順で記述する。

Copyright © 2011 Research Institute for Oriental Cultures Gakushuin University. All Rights Reserved.

「旧制学習院歴史地理標本室コレクション」は旧制学習院の学生たちが中国史、アジア史を学ぶときに使った現物教材です。すべて史料館の所藏品です。私は中国古代史を専門にしているので、これらの資料に大変興味を持っていました。このなかには、祭祀に使われた穀粒文玉璧、漢代のお墓の副葬品（明器といえます）の陶製の牛車や犬。また、北魏時代の造像銘や唐代の唐三彩などもあります。こういった中国文物の多くは江藤清雄という人物が学習院に販売したことがわかっています。ほかに朝鮮半島の文物もあります。忠清南道の弘慶寺跡出土平瓦片・丸瓦片は清水元太郎氏の寄贈、慶州で発見された新羅焼片耳付広口壺は有馬華子氏の寄贈ということがわかっています。どういう形で学習院に入ってきたのか、骨董商、古美術商を通じて買ったものなのか、現地から持ち出したものなのかということは重要であると思います。「銅鏡（林コレクション）」は卒業生の林裕巳さんが収集した鏡です。もとは東洋文化研究所で調査していましたが、現在は国際研究教育機構で保管しています。二〇〇枚以上の銅鏡（中国・朝鮮・日本のもの）があります。

「近代東アジアの世界」では「磯野文庫」「旧東亜経済調査局回教関連資料」を掲載しています。それぞれの資料の概略は前述したとおりです。磯野文庫のうち蒙古聯合自治政府による土地関係資料をまとめた「白契彙集」は全冊を

公開しています。「友邦文庫の世界」は前述したように大変貴重な朝鮮総督府関係文書で、「朝鮮問題雑纂（阪谷文書）」「渡辺忍文書」「半島近世年表」「朝鮮社会経済写真集（善生永助蒐集写真）」「韓国仁川写真帖」に分類されています。阪谷文書は西園寺内閣で大蔵大臣をつとめた阪谷芳郎氏があつめた資料、渡辺忍文書は朝鮮総督府の農林局長であつた渡辺忍氏の所蔵していた総督府の局長会議の資料で、ともに朝鮮近代史の研究をする上で貴重な資料です。バーチャルミュージアムでは全ページを公開しています。半島近世年表は明治四三年から昭和八年までの朝鮮総督府高官の氏名と在任期間が年表形式にまとめられた大きな掛図です。バーチャルミュージアムでは細かい人名や官職名まで拡大して確認することができます。朝鮮社会経済写真集は朝鮮総督府の調査活動に従事した善生永助氏が蒐集した写真一三二点を公開しています。「漢籍の世界」では「東洋文化研究所蔵古典籍」として、研究所蔵の漢籍を閲覧することができます。大学図書館蔵の漢籍はありませんので、冊数はそれほど多くありません。しかしながら、「鼎鏡國朝史記事實類編評釋日記故事」は中国の明代に出版された書籍で、現在ではほかには見られない天下の孤本です。この書籍もバーチャルミュージアムで全ページを閲覧することができます。また、戦後、学習院大学で漢文の教授をされていた澤口剛雄氏旧蔵の漢籍も近年公開しました。こ

のように国内外の研究者が研究室に居ながらにして貴重な資料にアクセスできるということがバーチャルミュージアムの目的であり、そのために資料のデジタル化をすすめてきたと言えます。

最後に「アジアの肖像」というカテゴリーがあります。これはその後の研究と関係がありますが、古写真と絵はがき資料です。「学習院大学史料館所蔵ガラス乾板資料」「風俗写真・絵葉書資料（満洲・朝鮮・アイヌ）」「中国大陸絵葉書資料」等に分類されています。ガラス乾板資料は主に旧制学習院の教材として教室に大きく投影して使われていたものと考えられます。このなかには、先ほど紹介しました広開土王碑のほか、中国浙江省会稽山・山西省臨汾堯王廟など古代中国史の史蹟、ドイツ青島領有碑等当時の写真、ベトナムのハノイの橋や階段、会議場、ゲェン国王の写真、洋書の図版を撮影したと思われる中央アジアのティムールの玉座やウズベキスタンのプハラの写真などがあります。当時、これらの写真教材を使ってどのような授業が展開されていたのか、画像を公開することで、将来的に国内の教育史研究者にもかかわってもらうことができると思います。「風俗写真・絵葉書」は学習院図書館が明治三九年に購入した写真群です。バーチャルミュージアムには満洲・朝鮮・アイヌの写真が公開されています。撮影された場所が、現在、どのように変わっているのか、都市史研究

でも画像資料の利用価値は高まっています。「中国大陸絵葉書資料」は主に、白鳥庫吉の弟子で東洋文庫の発展に寄与した東洋史学者の石田幹之助氏の寄贈による三四五枚の絵はがきです。絵はがきは中国の天津・上海・奉天・大連・撫順・遼陽・濟南・青島・漢口等のものです。学習院の学生は大正七年以降、海外修学旅行に行っており、その準備にもこれらの資料が活用されたのかもしれない。以上がこの第二段階で作成した「東アジア学バーチャルミュージアム」の概要です。

これとは別に大学図書館では「学習院大学デジタルライブラリー」というサイトを並行して作っていました。「バーチャルミュージアム」は資料の検索ができないのですが、こちらはもととGLIM-OPACという一般書の図書検索システムに組み込まれない資料、特に京都学習院以来の漢籍資料などを対象にしています。貴重書／史料館収蔵資料／東文研資料（東アジア学ナリッジベース）／漢籍のカテゴリーの資料が検索可能です。貴重書のうち華族会館寄贈資料・京都学習院旧蔵資料は学外からも閲覧可能です。このデータベースでの「東文研資料」と「漢籍」のカテゴリーで東洋文化研究所の調査の一部が反映されています。例えば、司馬遷の著した『史記』を検索してみましよう。東文研資料と華族（華族会館旧蔵）、漢籍と示された書籍が検索結果に出てきます。東文研資料『史記』という検索結果

は中華書局の活字版のもので、一般の書店でも販売されているものです。また華族『史記』という検索結果もみられますが、データベースの書誌データを見ると、この本がどれだけ貴重なものかはわかりません。検索結果の左上の本文というバナーをクリックしますと、バーチャルミュージアムと同じイパレットの画面で書影を見ることができません。この画面でも解説はありません。私たちが刊行した『知識は東アジアの海を渡った』では小秋元段先生にこの華族会館旧蔵の『史記』に関する詳しい解説を書いていただいています。この『史記』は慶長古活字版『史記』と称されるものです。本書は三種ある古活字版『史記』のうち第一種に当たり、一六〇三年よりも以前の刊行物です。各冊に題箋が残っているのが貴重です。「養賢閣図書記」という蔵書印があり、徳川宗家から華族会館を経由して学習院に入った本です。養賢閣は徳川家定のころに開設されたと考えられています。詳しくは小秋元先生の解説を御覧いただきたいのですが、このデジタルライブラリーには華族会館旧蔵ということ以外の本書の書誌学的な情報はありません。もうひとつ、検索結果で漢籍『史記』と表示された書籍には『義門読書記 史記』という書籍があり、清代の考証学者の何焯による叢書の一部です。現在、大学図書館旧分類書庫に架蔵され、学習院には大正三年に入りました。この漢籍というカテゴリーは東洋文化研究所が書誌学的な

情報を調査した成果になります。タイトル・撰著者名・和漢分類・四部分類・印刷形態・冊数・題箋・行数・字数・四周・界・書口・魚尾・段句・版心題記・框高・保存状態などの情報を掲載しています（本書は叢書のためありませんが、刊年も重要な情報です。また、蔵書印も重要です）。現在、東洋文化研究所で調査した漢籍の情報は十分の程度しか、デジタルライブラリーには反映されていません。すでに調査はほぼ終わっていますので、できるだけ早くバージョンアップできればと思います。書誌学・図書学などの研究者が見て、情報を共有できるようにすることによって、世界に情報が広がるのではないかと思います。デジタル化というのは、ただ見せればいいだけではなくて、見せることによって、そこから閲覧者がどういう知識を得ていくか、さらには様々な知識を持った人々が関連する情報をフィールドバックしてくれることによって、ひとつの資料から連鎖的に研究者ネットワークが広がってゆく。そういう波及効果まで踏まえたデジタル化とその公開をおこなう必要があると思います。



学習院大学デジタルライブラリー（学習院大学図書館）
<http://glim-els.glim.gakushuin.ac.jp/>

義門讀書記史記 二巻	
(高)何焯撰 <KS00000088>	
本文を報告	
詳細	
目録	資料種別 漢籍
	タイトル 義門讀書記史記 二巻
	撰著者 (清)何焯撰
	著書名 義門讀書記 16册(清)何焯撰、(清)曹維鈞輯
	和漢分類 漢
	西部分類 史部 第一正史類
	印刷形態 刊本
	冊数 1
	編纂 義門讀書記
	行数 14
	字数 22
	西周 左右雙邊
	界 有
	書口 墨口
	魚尾 單魚尾
	款句 有
	慮心題記 義門讀書記史記
	紙高 14.9
	請求番号 115/105
	収蔵先 東1
	登録番号 62681
	タテ 23.9
	ヨコ 15.3
	保存状態 虫喰い。
	購入日 大正三年三月二十七日
	KD番号 6

四、第三段階（二〇一二年～二〇一四年）

学習院の「東洋学」の教育とアジアコレクション

二〇一二年、私は東洋文化研究所を離れて、新設された学長付国際研究交流オフィスへと異動します。その前年、東洋文化研究所と大学史料館と共同で学習院の東洋学の教育とアジアのコレクションの調査・研究の計画を立てました。そしてその計画は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成事業「近代アジアへの眼差しと教育―学習院コレクションの活用」（代表：大澤顯浩、二〇一二年～二〇一四年）として採択されました。

このプロジェクトをはじめの前、私自身が関心をもったテーマが二つありました。ひとつは古写真への興味です。私は一九九三年と二〇〇二年の二回、中国の西安という古都に留学しました。秦漢代の遺跡、唐代の建築が生活のなかに残る街です。二十世紀初頭、この古都に日本人教師として赴任した足立喜六という人物がいました。彼は西安滞在中、多くの写真を撮影し、自身の著書である『長安史蹟の研究』に掲載しました。彼の残した写真と同じアングルから現在の西安の文物を撮影して、その変化を調査すれば、文物保護の意識の変化を知ることができると考えました。近年の中国の開発の進展による街の風景の変化が、古写真の歴史資料としての価値を高めていると思います（村

松弘一「清末西安の教育と日本人教習―足立喜六を事例に―『学習院大学国際研究教育機構研究年報』二号、二〇一六年参照）。もうひとつの興味は文物移動史です。清朝が崩壊し中華民国期に入ってから西安では様々な部局が文物の保護に関わります。例えば南京国民政府の西京籌備委員会や重慶政府の西北芸術文物考察団などの機関がそれにあたります。それがばらばらに文物の保護をすすめ、全体を統合した博物館がつけられなかったのです。それが西安の文物が海外に流出した原因と言えます（村松弘一「西安の近代と文物事業―西京籌備委員会を中心に―」『近代中国の地域像』（山本英史編）、山川出版社、二〇一一年参照）。西安の流出文物で最も有名なものが、唐の「六駿」という六頭の馬のレリーフです。足立喜六の写真には六頭の馬のレリーフが写っていますが、現在は四頭の馬のレリーフは中国の西安の碑林博物館にあり、二つはフィラデルフィアのペンシルベニア大学博物館にあります。これまでこの二つのレリーフはアメリカ人が勝手に持っていったもので、中国がまず取り戻さなければいけない流出文化財であると言っていました。ところが、近年、ペンシルベニア大学博物館のアーカイブズに「C.ルー（盧芹齋）」という中国人骨董品屋から博物館が購入したという文書が見つかりました（村松弘一「引き裂かれた唐昭陵「六駿」―ペンシルバニア大学アーカイブズ資料から―」『世界の蒐集―アジアを

めぐる博物館・博覧会・海外旅行」（福井憲彦監修、村松弘一・伊藤真実子編）、山川出版社、二〇一四年参照）。二つのレリーフはアメリカ人によって国外に持ち去られたものではない可能性が高まっています。

このような研究をすすめるなかで、学習院の所蔵するアジア文物はどのようなルートで入ってきたのかという文物移動史に興味を持ちました。白鳥庫吉が「東洋諸国の歴史」を始めたのが一八九〇年のこと、その後、目白にキャンパスを移して、歴史地理標本室を開設し、実物教材で授業を実施しますが、それらの教材は震災で失われることになりました。そこで実物教材を新たに購入することになります。そのときに登場してくるのが前述した江藤清雄という人物です。彼は、中国の西安の南の漢中というところで漢方薬の商いをしていました。そのとき、多くの文物を現地の農民から購入していたようです。それを日本でも販売していました。江藤氏を通じて中国文物を購入していたのは学習院だけではなく、東京大学の考古学研究室もそうでした。それらは高価な骨董品というよりも実物教材になるようなものであったと思います。また、前述した石田幹之助氏寄贈の絵はがきも震災後の歴史地理標本室の資料の充実にために寄贈されたと考えられています。

さて、この第三期には特別展覧会を一回実施しました。一回目は学習院大学東洋文化研究所六〇周年記念特別展覧

会「学習院の東洋学―オリエンタル・カルチャーの教育史」（学習院大学史料館展示室、二〇一二年二月）というもの。白鳥庫吉から末松保和、小倉芳彦先生までの学習院で教鞭をとった東洋学者を年代順にパネルに並べ、それぞれに関連する東洋学教育の教材を展示する試みでした。二回目は学習院大学・永青文庫・東洋文庫三館連携特別展「東洋学の歩いた道」（学習院大学史料館・永青文庫・東洋文庫ミュージアム、二〇一三年八月～二月）という展覧会でした。学習院大学の前の目白通りを東へ行きますと永青文庫があり、その先に東洋文庫があります。永青文庫は学習院を卒業した細川護立の藏品が収められていますし、東洋文庫は白鳥庫吉が理事長をつとめていたことがあり、ともに学習院の東洋学の教育と関係のある研究・収蔵機関です。学習院大学では「アジアを学ぶ―近代学習院の教育から」をテーマに書籍や文物、それから古写真も展示をしました。永青文庫では「古代中国の名宝―細川護立と東洋学」と題して、国宝の漢代の銅鏡とそれをもとに一九三〇年代に作成された銅の芸術品を一緒に展示しました。この展示は古代中国史を専門とする私にとっては、とてもおもしろかったなと思います。東洋文庫のテーマは「マルコ・ポーロとシルクロードの世界遺産―西洋生まれの東洋学」でした。三館合わせて一〇〇点以上の書籍・文物・写真が展示されました。展覧会と同時に『東洋学の歩いた道』（学習院大学・

永青文庫・東洋文庫編、学習院大学発行、二〇一三年）を
刊行しました。

この間、三冊の図録も刊行しました。『百聞ハ一見ニ如
カズー旧制学習院歴史地理標本室移管資料』（学習院大学
史料館編、学習院大学史料館、二〇一三年）は歴史地理標
本室の資料で学習院大学史料館の所蔵する実物教材二〇七
点に写真と解説を付して刊行したものです。中国や朝鮮半
島、南洋諸島、そして日本に関する実物教材を掲載してい
ます。『アジアを観るー学習院大学所蔵古写真・絵葉書・
ガラス乾板』（学習院大学国際研究教育機構編、学習院大
学、二〇一五年）では古写真・絵はがき五四点とガラス乾
板六〇点について解説を付して掲載するとともに、写真に
よっては同じアングルから撮影した現在の写真も並べ、比
較できるようにしました。『学習院大学所蔵明刊本図録』（大
澤顯浩・陳正宏編、学習院大学、二〇一五年）は学習院大
学図書館等にある漢籍のうち明代に刊行されたものを選
び、写真・解説を付したものです。復旦大学の陳正宏教授との
国際共同研究という点で意義があります。

旧制学習院資料バーチャルミュージアム「学生たちのアジアへの
まなざしー修学旅行・教材から」（学習院大学史料館）
<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua/records/>

過去 全体 拡大 縮小



① ソウル駅

ソウル駅は1900年に設立された南大門停車場駅がその前身で、1923年から1947年までは京城駅と呼ばれていた。旧ソウル駅舎は東京帝国大学建築学科教授の塚本靖教授（1869～1937）とドイツ人建築家ゲオルク・デ・ラランデ

戻る

「東洋学の歩いた道」の展示の際に作成し、その後、WEB公開したサイトに「旧制学習院資料バーチャルミュージアム」があります。これは学習院大学史料館のWEBサイトのなかに置かれたものです。「アジアを学ぶ―近代学習院の教育から」展で展示したバーチャルミュージアム「学生たちのアジアへのまなざし―海外修学旅行・教材から」のWEB公開版です。こちらのサイトは凸版印刷に作成をお願いしました。トップページをクリックしますと、東アジアの地図が表示され、哈爾濱・長春・奉天・大連・旅順・北京・張家口・天津・青島・曲阜・京城・釜山・台北の地名が示されています。例えば「京城」をクリックするといくつかの地点が示されます。ソウル駅を見ると、解説と過去の写真があらわれ、上のバーを過去から現在にスクロールすると現在の写真に徐々に変わっていくものです。これは結構わかりやすくてよいのではないかと私は思っています。様々な建築物が修復されているものもあれば、壊されたものもあります。今後、どういうものが壊されて、どういうものが修復されているのかということとを細かく分析する必要があるだろうと思っています。絵葉書とか古写真とかビジュアル系の非文字画像資料は漢字圏以外の海外の研究者も参加しやすい分野であると思います（ケネス・ルオフ「移動する帝国―絵葉書が語る大日本帝国」『学習院大学国際研究教育機構研究年報』二

号、二〇一六年ほか参照)。また、アメリカのラファイエック・トカレッジのポール・バークレー教授は「East Asia Image Collection」というWEBサイト (<http://digital.lafayette.edu/collections/eastasia>) を運営し、東アジアの絵葉書資料の収集・整理・公開をおこなっています。古写真・絵葉書研究は世界の研究者との共同研究が可能な分野であると言えるでしょう。そのためにも、できるだけ多くの情報をデジタル化し、インターネットを通じて発信することには意義があると思います。

五、第四段階(二〇一五年～現在)

古写真・絵はがきと旅行記、都市史

二〇一四年に私は新しく大学附置研究所として新設された国際研究教育機構という部署に移ります。その翌年、新たなプロジェクトをはじめます。日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金に採択された「東アジアの都市における歴史遺産の保護と破壊―古写真と旅行記が語る近代」(代表：村松弘一、二〇一五年～二〇一七年)です。このプロジェクトではこれまでの古写真・絵葉書と旅行記の研究成果と都市史をどのように結びつけるかということを試みています。すでに成果の一部は国際研究教育機構のWEBページのなかに「東アジアの都市における歴史遺

産の保護と破壊―古写真と旅行記が語る近代バーチャルミュージアム」を公開しています。今回は展覧会に先行してバーチャルミュージアムを公開しました。サイトを見ていただければわかりますが、絵はがきを手がかりに、都市の構造の中に入り込み、撮影地点を明確にしつつ、これまでのものよりもっとミクロな世界から都市の変化をみます。このバーチャルミュージアムではこれまでの二つのサイトと差別化をはかるために、近年購入した絵はがき資料を多く使っています。これまでのように学習院の歴史と深くかかわる資料のみを提示するというよりも、アジアの都市の変化をより多くの資料から確認することを目的としているからです。このサイトではハルビン(ハルビン)・新京(長春)・奉天(瀋陽)・大連・北京・青島・上海・濟南・京城(ソウル)・台北の十都市を対象としています。上海のページでは「描く立体図(南京路)」「流れ静かに(上海郵政局)」「大上海の実相を(バンド)」などの絵はがきの表と裏を提示し、その写真と同じアングルから撮影した現在の上海の写真を示し、さらに、その位置をGoogle マップに図示するというかたちで一枚一枚閲覧できるようにしています。まだ、全都市のサイトが完成しているわけではありませんが、今後、整備してゆく予定です。また、二〇一六年一月には、東京芸術劇場アトリエウエストを会場に特別展覧会「旅をしぞ思ふ―戦前の絵葉書にみる東アジアの都市景観」を開

催しました。会期中五〇〇名あまりの方に御覧いただくことができました。この展覧会では上述の十都市について、絵はがきと現在の写真、古地図をわかりやすく表示して展示しました。ソウルの展示では旧制学習院の学生の朝鮮旅行記を解説に挿入し、台北の展示では史料館所蔵の高松宮殿下下賜の写真も活用し、学習院らしい展示となりました。今後はWEBサイトの充実とともに展覧会の展示内容を書籍として出版したいと準備をしています。



東アジアの都市における歴史遺産の保護と破壊—古写真と旅行記が語る近代—バーチャルミュージアム
(学習院大学国際研究教育機構)
<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/geore/2015A/index.html>

以上で私が東洋文化研究所にとめてからの一四年にわたる学習院大学アジアコレクションのデジタル化についてご紹介しました。あらためて、我ながら多くの方の協力をいただきながら、ゼロからいろいろなことに挑戦してきたなと思います。ただ、残念なことは、私が学内の部署を異動して調査・研究をすすめてきたために、東洋文化研究所

六、おわりに

shanghai_geore_002：南京路（描く立体図）

南京路についてはshanghai_geore_002を参照。左下に見える設計図は、賭博場を築くことを目的として建てられた国際聯合住宅である華世飯店（南京、China United Apartment Building、1926年竣工）の一部。中央の丸は大新公司（1936年竣工）で、大新公司は1914年と1920年両回のラオス賭博に賭けて、他の2つの賭博会社（永利、怡和）が破産して廃業しているが、大新公司はブル・アゴ様式である。南京路沿いを築くと新報公司、先施公司が隣りあって並び、その向かいには永安公司が建つ。写真の右、黒帯にわずかに賭博場が見え、新世界を囲んで奥には聖界住宅の遺構が残っている。遠角から考えると、現在は国際飯店となっている内行健康飯店（パーク・ホテル、1933年竣工）から撮影したものと推測される。また、大新公司が建っていることから1930年以降の光景であろう。



に「東アジア学バーチャルミュージアム」、史料館に「旧制学習院のバーチャルミュージアム」、国際研究教育機構に「古写真と旅行記のバーチャルミュージアム」があるように、学内の複数の部署のサイトにバーチャルミュージアムが分散化してしまいました。お互いを結びつけるリンクのバナーもあります。全体を俯瞰し、交通整理する組織のもとに、ポータルサイトをつくる必要があるのではないでしょうか。学内外、さらには海外の研究者・市民がそこにアクセスして、全体を理解していただけるようにしたいと考えています。なかでも文物や古写真など非文字資料の研究は間口が広い。前述のように海外の研究者も多く参加していますし、国内でも、満洲で生まれ育った方々、肉親が大陸や半島から引き揚げてきた方々など、多くの市民の皆さんにインターネットを通じて学習院の資料にアクセスして、興味を持ってもらったり、懐かしんでもらったりすることができるとして、ご自身が持っている古写真や絵葉書の情報を新たな資料として提供してもらうことができるかもしれません。デジタル化とは自分たちが持っている資料を一方的に提示するだけでなく、それを通じて、人と人のネットワークが広がってゆく、そういうものでないとならないと思います。講演の依頼をいただいたとき、後先を考えずに、表題を「デジタル化のあととき」にしましたが、結論を申し上げるなら、デジタル化のあとには、資料のま

わりにそれまで知らなかった人と人のつながりができ、それにかかわる人々が一緒に研究し、考えていく、そのような場となることができれば、よいのではないのでしょうか。以上、私の発表はこれで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

(了)

2003年～2016年 学習院大学アジアコレクションデジタル化 年譜

第一段階 2003年～2007年 アジアコレクション調査のはじまり

- 2003年～2004年 学習院新規重点施策「学術資料・文書等の管理と有効利用の在り方調査プロジェクト」(お宝プロジェクト)
- 2004年～2007年 学習院大学東洋文化アーカイブズプロジェクト
 - 2005年5月 「学習院大学所蔵東アジア関連資料について」ハーバード大学フェアバンクセンターワークショップ(ハーバード大学燕京図書館)
 - 2007年1月 学習院大学・ハーバード大学国際学術シンポジウム「東アジア学のフロンティア」(学習院百周年記念会館)

第二段階 2007年～2011年 アジアコレクションの公開

- 2007年～2011年 学習院大学東アジア学ナレッジセンター
(文部科学省・オープンリサーチセンター整備事業、代表：岡孝)
- 2008年9月 特別展示「東アジアにおける陽明学 第二部学習院大学所蔵漢籍からみる東アジア」(学習院大学多目的ホール)
- 2010年1月 学習院大学開学60周年記念特別展「知識は東アジアの海を渡った—学習院大学コレクションの世界」(丸善丸ノ内本店・学習院大学史料館)
- 2011年3月 『友邦文庫目録』勁草書房
- 2011年3月 東アジア学バーチャルミュージアム(学習院大学東洋文化研究所)
学習院大学デジタルライブラリー(学習院大学図書館)
- 2012年3月 『学習院大学図書館(旧分類書庫)所蔵漢籍目録稿』学習院大学東洋文化研究所

第三段階 2012年～2014年 学習院の「東洋学」の教育とアジアコレクション

- 2012年～2014年 近代アジアへの眼差しと教育—学習院コレクションの活用
(文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成事業、代表：大澤顯浩)
- 2012年12月 学習院大学東洋文化研究所60周年記念特別展覧会「学習院の東洋学—オリエンタル・カルチャーの教育史」(学習院大学史料館展示室)
- 2013年3月 『百聞ハ一見ニ如カズ—旧制学習院歴史地理標本室移管資料』学習院大学史料館
- 2013年8月～12月 学習院大学・永青文庫・東洋文庫三館連携特別展「東洋学の歩いた道」
(学習院大学史料館・永青文庫・東洋文庫ミュージアム)
- 2015年3月 『アジアを観る—学習院大学所蔵古写真・絵葉書・ガラス乾板』学習院大学
- 2015年3月 『学習院大学所蔵明刊本図録』学習院大学
- 2015年3月 旧制学習院資料バーチャルミュージアム(学習院大学史料館)

第四段階 2015年～現在 古写真・絵はがきと旅行記、都市史

- 2015年～2017年 東アジアの都市における歴史遺産の保護と破壊—古写真と旅行記が語る近代(日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金、代表：村松弘一)
- 2016年3月 東アジアの都市における歴史遺産の保護と破壊—古写真と旅行記が語る近代バーチャルミュージアム(学習院大学国際研究教育機構)
- 2016年11月 特別展覧会「旅をしぞ思ふ—戦前の絵葉書にみる東アジアの都市景観」(東京芸術劇場アトリエウエスト)

学習院大学アジアコレクションを知るための参考文献

(書籍)

『旧制学習院歴史地理標本室移管資料目録』(学習院大学

史料館所蔵史料目録一四号)、学習院大学史料館、

一九九八年

『学習院大学蔵朝鮮戸籍大帳等目録―学習院大学蔵朝鮮戸

籍大帳の基礎的研究(五)―』(調査研究報告五二号)、

学習院大学東洋文化研究所、二〇〇三年

『知識は東アジアの海を渡った―学習院大学コレクション

の世界』、学習院大学東洋文化研究所編、丸善プラネッ

ト、二〇一〇年

『友邦文庫目録』、学習院大学東洋文化研究所編、勁草書房、

二〇一一年

『東アジア書誌学への招待 一・二』、大澤顯浩編、東方書店、

二〇一一年

『学習院大学図書館(旧分類書庫)所蔵漢籍目録稿』、学習

院大学東洋文化研究所、二〇一二年

『学習院大学東洋文化研究所所蔵資料紹介―末松保和資料』

(調査研究報告五六号)、学習院大学東洋文化研究所、

二〇一二年

『百聞ハ一見ニ如カズ―旧制学習院歴史地理標本室移管資

料』、学習院大学史料館、二〇一三年

『東洋学の歩いた道』、学習院大学・永青文庫・東洋文庫編、

学習院大学、二〇一三年

『アジアを観る―学習院大学所蔵古写真・絵葉書・ガラス

乾板』、学習院大学国際研究教育機構編、学習院大学、

二〇一五年

『学習院大学所蔵明刊本図録』、大澤顯浩・陳正宏編、学習

院大学、二〇一五年

『西川寛生』サイゴン日記』、武内房司・宮沢千尋編、風響社、

二〇一五年

『小倉進平関係資料目録―学習院大学東洋文化研究所蔵』

(調査研究報告六〇号)、学習院大学東洋文化研究所、

二〇一六年

『学習院大学所蔵銅鏡 林コレクション』、学習院大学国際

研究教育機構編、学習院大学、二〇一七年

(論説・目録・リスト等)

鹿島晶子「水野鍊太郎・政直旧蔵書籍・雑誌について」『東

洋文化研究』七号、二〇〇五年

大澤顯浩「鼎録國朝史記事實類編評釋日記故事」解題』『東

洋文化研究』七号、二〇〇五年

青木敦子「ある日本人の朝鮮体験―上甲米太郎日記」史

料紹介―』『東洋文化研究』八号、二〇〇六年

小志戸前宏茂「近藤劔一旧蔵書籍・雑誌について」『東洋

文化研究』八号、二〇〇六年

坂田充「学習院大学所蔵 高松松平家旧蔵書の概要とその

- 伝来経緯―華族会館旧蔵書研究の一環として―『人文』六号、学習院大学人文科学研究所、二〇〇七年
- 広瀬淳子「学習院が所蔵する徳川宗家旧蔵書について―忘れられた華族会館寄贈図書―」『人文』八号、学習院大学人文科学研究所、二〇〇九年
- 村松弘一「書籍と文物がつなぐ日本と東アジアの近代―学習院大学コレクションから」『東アジア書誌学への招待 一』（大澤顯浩編）、東方書店、二〇一一年
- 広瀬淳子「学習院が所蔵する華族会館旧蔵洋書について―忘れられた華族会館寄贈図書その二―」『人文』一〇号、学習院大学人文科学研究所、二〇一一年
- 長佐古美奈子「学習院における歴史教育の始まりと標本室」『学習院大学史料館紀要』一九号、二〇一三年
- 橋本佐保「学習院と「明倫中学校付属博物館」―旧制学習院歴史地理標本室移管資料を中心に―」『学習院大学史料館紀要』一九号、二〇一三年
- 中見立夫「学習院における「東洋学」の形成と資料収集・出版をめぐる」『東洋文化研究』一六号、二〇一四年
- 武田幸男「学習院大学所蔵「広開土王碑」拓本の研究」『東洋文化研究』一六号、二〇一四年
- 村松弘一「アジアを学ぶ―近代学習院の教育―人と人とのかわりから」『学習院大学国際研究教育機構研究年報』一号、二〇一五年
- 辻大和・富澤萌未「上甲米太郎関係資料目録―植民地朝鮮の教員の日記」『東洋文化研究』一七号、二〇一五年
- 辻大和「池田佐忠関係資料目録―植民地朝鮮尚道の写真を中心に―」『東洋文化研究』一七号、二〇一五年
- 海老根量介・石原遼平「澤口文庫目録」『東洋文化研究』一八号、二〇一六年
- 中嶋諒「学習院大学図書館所蔵漢籍から見なおす京都学習院の教育―菅原氏、清原氏にかかわる京都学習院旧蔵書を手がかりに―」『学習院大学史料館紀要』二二号、二〇一六年
- 村松弘一「明治―昭和前期、学習院の中国人留学生について」『学習院大学国際研究教育機構研究年報』三号、二〇一七年

